

氏名	小谷 量子
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第 196 号
学位授与年月日	2017（平成 29）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	洛中洛外図屏風の研究 歴博甲本 上杉本
論文審査委員	主査 藤井雅子（史学専攻 准教授） 副査 吉村雅美（史学専攻 講師） 副査 福田安典（日本文学専攻 教授） 副査 三枝暁子（東京大学大学院人文社会系研究科准教授） 副査 永村 眞（本学名誉教授）

論文の内容の要旨

はじめに

本論は、初期洛中洛外図屏風の中から、国立歴史民俗博物館蔵洛中洛外図屏風甲本（以下甲本）と、米沢市上杉博物館蔵洛中洛外図屏風（以下上杉本）を取り上げ、この 2 本の洛中洛外図屏風は、歌・物語絵屏風であることを論証し、主題・制作目的・注文者を確定することを目的としている。さらには、その注文者である足利將軍家に着目し、これまで看過されてきた戦国期足利將軍家の女性たちについて検証するものである。

本論で取り上げる国立歴史民俗博物館蔵洛中洛外図屏風甲本は、現存最古の洛中洛外図屏風で、重要文化財に指定されている。

米沢市上杉博物館蔵洛中洛外図屏風は、狩野永徳筆、国宝である。『上杉年譜』には、天正 2 年（1574）3 月、織田信長から上杉謙信に、洛陽の名所を描いた屏風と源氏物語屏風が贈られたという記録がある。

この 2 本を選んだ理由は、甲本が現存最古の洛中洛外図屏風であること、上杉本は東博模本より制作年代（景観年代ではない）が古く、現存 2 番目に古い作品と考えるためである。また、この 2 本は絵画史料としても、美術品としても、伝来の確かさも他の追随を許さない。この 2 本の洛中洛外図屏風は、その後多数制作された洛中洛外図、その他の都市図屏風に大きな影響を与え、都市図屏風の基本となった。

この 2 本の洛中洛外図屏風の主題・制作目的の研究は、他の都市図屏風の主題・制作目的を考えるうえで重要である。さらに、洛中洛外図屏風の絵画史料としての、基礎条件を明らかにできるであろう。くわえて、洛中洛外図屏風の主題を探ること

は、室町将軍家の願い、鎮魂などの宗教観、戦国期政治史にも迫ることである。

また、戦国期における歌絵の状況は未解明であるが、歌絵は戦国期においても「やまと絵」の中で主たる地位を占めていた。本研究は、文学・美術史研究にもその成果を問うことができるであろう。

これまで、洛中洛外図屏風は文学的素材とは無縁と考えられてきた。そして、戦国期の京都を写實的に描写した都市図であり、管領細川氏や、将軍足利義輝の政治構想が主題であるとされてきた。また、地方在住者が都に憧れ、京都を描かせたという意見もある。しかし、こうした言説は、近現代的芸術観に影響されているのではないだろうか。

さらに、戦国期の将軍権力研究は近年漸く活発化してきたといえる。従来、戦国期将軍は傀儡に過ぎず、無力な存在とされてきた。しかし近年は、戦国期においても将軍は支配権を持ち、むしろ管領制度は終焉し、将軍による側近政治が行われたとされる。

また、1950～80年代に、時代背景とも関連して「町衆論」が台頭した。洛中洛外図は、台頭する町衆の自由な空気を描く風俗画であり、復興する京都に憧れを持つ、地方在住者が屏風の注文者であるという見解が出された。しかし、戦国期の京都は、長い京都の歴史の中で最も京都が衰微していた時期なのである。さらに、従来の研究では注文者の中に女性はまったく想定されず、男性中心の権力論による解釈が行われてきた。

このような研究状況に対し、本論は、歴博甲本・上杉本は、やまと絵の伝統である文学的素材を背景とした歌・物語絵屏風であるということを論証し、描かれた歌・物語から主題・制作目的・注文者・制作年代を検討し、この2本の洛中洛外図屏風は、将軍家が先代室町殿の年忌法会のために制作した歌・物語屏風であることを論証した。くわえて、戦国期の将軍支配権、戦国期歌絵、戦国期将軍家女性たちの動向を検討した。

文献史料だけでは、捉えにくい将軍家の願いや人間関係が反映された絵画史料は、戦国期政治・文化・思想を解明する有益な史料である。

本論の構成

本論で明らかにしたことをまとめておこう。

序論では、研究史と本論の課題をまとめた。洛中洛外図屏風研究の中心は長らく上杉本が中心であった。そして、2000年以降甲本研究も活発化した。洛中洛外図屏風研究は、膨大な研究蓄積がある。その中でも、画期となり、洛中洛外図研究に大きな影響を与えたと考える10人の論者の研究を中心に検討した。

洛中洛外図屏風研究は、「写生画」「絵画史料」として出発した。そのため、美術史研究者以外からも多くの関心を集めた。そして、太平洋戦争後、都市の復興が急

激に進んだ時代背景も影響し、「都市図」ということが強調され、文学とは無縁とされた。

1990年代は、上杉本研究のピークであった。論争が行われ、上杉本は将軍による政治構想図であり、永禄8年制作、狩野永徳筆であるということが定説となった。2000年代になると、甲本研究も進んだ。そこでは、細川高国の政治構想が主題の都市図屏風であるとされた。

洛中洛外図研究の論点は、①景観年代②制作年代③注文者④制作目的⑤主題であった。しかし、膨大な研究蓄積は、すべてが一般書や図録の解説、単発の論文、別の研究目的の一部であり、系統的に洛中洛外図を研究した専門書はついに現れなかった。これは、洛中洛外図研究が、各分野にまたがる研究となるため、その専門家が現れなかったことを意味している。

第一部は甲本・上杉本解釈の前提条件についての論考である。第一章は、戦国期歌絵に関する論考である。古代やまと絵において、歌絵は主流の位置にあった。しかし、中世以後の歌絵研究は乏しく、その実態は未解明である。そこで、戦国期における歌絵の実態と歌絵の手法について検証した。さらには、歌・物語絵における異時空間同図の手法、文学とは無縁とされる近世初期風俗画というジャンル発生について検討した。

その結果、戦国期においても歌絵はやまと絵の主流であり、異時空間同図で描かれることは、やまと絵においてごく一般的なことであった。また、文学とは無縁とされる「近世初期風俗画」という、ジャンル分けは、戦後の時代背景に影響されたものであることを論じた。

第二章は、景観年代の決め手となり、論争がある将軍邸の特定を行った。それに関連して、この近辺にあった小川御所・11代将軍義澄邸・勝元～昭元までの細川邸・大心院・細川被官安富邸の位置を確定した。これにより、甲本将軍邸は、12代将軍義晴の大永度御所であり、細川邸は細川高国の時代と確定できる。

さらに、先行研究が解釈の前提としている京兆専制論や、比丘尼御所住持について検討し、甲本注文者は、大永度御所の主、足利義晴の可能性が高いことを論じた。

第二部は甲本に関する論考である。第一章は、甲本に描かれた細川高国と11代将軍義澄の歌絵に関する論証である。甲本上京隻（右隻・下帖）は、細川高国の辞世の句が少なくとも2句描かれている。また、下京隻（左隻・上帖）は、将軍義澄の文亀3年36番歌合の歌が3句描かれ、その相方の歌や、元歌も描かれている。そして、留守模様・同音異義語・隠し文字の歌絵の手法を駆使し、歌絵が描かれている。特に、3句目の「諸人の使ふる業も安かれや、正しき道を君にまかせて」の歌が主題である。

甲本全体の主題は、描かれた歌から「鎮魂・天下静謐」である。戦争の犠牲者の鎮魂は、平和を祈念することである。高国も義澄も戦争の犠牲者であった。そして、

この2人を鎮魂する立場にある人物は、義澄の息子で、高国を恩人とする12代将軍足利義晴において他にはいない。また、この2人を同図で描く必然性がある機会は、天文12年に義晴が行った船岡山合戦戦死者33回忌施餓鬼会が考えられる。船岡山合戦は、この2人の戦いであり、この年は義澄33回忌、高国13回忌が重なる特別な年回りであった。

さらに、室町将軍家が代々先代室町殿の年忌法会に制作してきた「融通念仏縁起絵巻」との関連、義満から始まった戦死者供養の施餓鬼会との関連についても考察した。

第二章は、甲本に描かれた三條西邸の鶯合と、実際とは異なる位置に描かれた近衛邸の図様について検討した。この2つの図様は不自然な図様であり、甲本解説の重要課題とされてきたが、その意味は不明であった。

三條西邸鶯合は、細川高国と三條西実隆の出会いを描き、高国・実隆の30年余りに及ぶ親交を描いた物語絵である。近衛邸は風呂が描かれ、細川高国と近衛尚通の別れの場面が描かれた高国・尚通親交の物語絵である。高国に深い関心があり、この2つのできごとを知る人物が甲本注文者である。それは、12代将軍義晴において他にはいないことを検証し、甲本注文者は足利義晴であることを論証した。

第三章は、甲本に描かれた祇園会は、11代将軍足利義澄の重要事績として描かれたことを論じた。祇園会は、その後多数制作された洛中洛外図にも数多く描かれる洛中洛外図屏風の主要画題であり、洛中洛外図の主題と密接な関係があると思われる。京都の数ある祭りの中で、なぜ、祇園会だけが営々と受け継がれたのであろうか。

戦国期における祇園会は、応仁元年以降中断し、義澄将軍期の明応9年に33年ぶりに再興された。義澄期は比較的安定して祭りが行われたが、その後は信長の時代まで、延引・追行が繰り返され、京都の夏の風物詩ではなかった。

先行研究では、義澄は傀儡将軍であり、幕府の実権は細川政元が握っており、祇園会再興も細川政元の事績と考えられてきた。そこで、祇園会再興を命じた幕府奉行人奉書に注目し、その発給人である奉行人の活動について検討した。発給人である3人の奉行人はいずれも義澄側近であり、義澄と運命を共にしている。また、経済面や義澄と政元の地位についても検討し、経済力のある政元が、祇園会に必要な神馬一疋の用意さえできないことはあり得ないこと、政元は身分が低く、鎌倉期まで院宣で命じられていた祇園会執行を命じる立場になく、一方義澄は天皇と結びついた寺社公家支配権・祭祀権を保持していたことを検討した。

さらに、政元が祇園会再興者である最大の証拠として挙げられている、永正3年の政元祇園会见物を検討した。これは、阿波から上洛した新たな家督相続者澄元に祇園祭を見物させ、家督相続者がこれまでの澄之から澄元に交代したことを公にし、その上で政元は引退するつもりだったというこの年の特殊事情なのである。この特

例をもって、政元が祇園会再興者であるとは言えず、むしろ幕府奉行人奉書の内容と、引退を望む政元の言動は一致しないことを論じた。

さらに、祇園会再興理由を検討し、祇園会再興は戦乱の終結と復興を象徴するものであり、疫病から民の暮らしを守る「御政道」そのものであったことを検証した。洛中洛外図に描き続けられた祇園会は、将軍徳治の許における天下静謐を表すモチーフとして受け継がれたのである。

第四章は、「観世能」と「禁裏南庭」の描写は、義澄の鎮魂の図様であることを論じた。「観世能」の図様は、現存最古の能楽の図様として、能楽関係者の注目を集めてきた。しかし、描かれた場所が不明で、観世の勧進能にしては観客がまばらで不自然なのである。

この図様は、義澄が好んだ能を描き、あの世から来た義澄らが観劇するこの世のものではない「観世能」を描いている。「観世能」は上京隻犬追物と対をなし、さらに、能の囲い下部は描かれておらず、「勧世能」は消えかけているのである。

義澄は毎月定日の能を将軍邸で開き、歴代将軍の中でも際立って能好きであった。そして、将軍出座の勧進猿楽は観世に限られていた。「観世能」の図様は、義澄の好んだ能を描く義澄鎮魂のモチーフである。

「禁裏南庭」は、衣冠の人物が1人で良向きに遥拝をしていることから、元日節会の内弁謝座の場面とされてきた。しかし、紫宸殿南階下に、肩衣の武士が座っている。本来は近衛陣があり、近衛次将が立つ場所である。そのため、朝廷の儀式について詳しくない絵師の描き間違いとされた。しかし、現代の我々でさえ気づく間違いを、当時の京都在住の注文者が見過ごすはずはない。

この図様は、異時空間同図で義澄の文亀3年正月の参内を描いている。屋内のできごとが、屋外に描かれているのである。衣冠を着し、武士を多数供に引き連れ参内する人物は将軍以外にいない。義澄は熱心に参内し、しかも夜明けまで長時間禁裏に滞在した。これは、大典侍広橋守子との親密な関係によるもので、これは公然の秘密であった。「禁裏南庭」場面は、義澄の恋物語を描く鎮魂のモチーフである。

第五章は、甲本に描かれた比丘尼御所について論じ、これらの寺に入室した将軍家女性たちと、宝鏡寺・南御所の所領を検討した。さらに、宝鏡寺に描かれた白布張りの図様は、宝鏡寺・南御所が持つ白布棚公事を表し、妹が方丈である宝鏡寺・南御所の白布棚公事を守ろうとした義澄の物語絵であることを論じた。

第三部は上杉本洛中洛外図屏風に関する論考である。第一章は将軍邸横に描かれた行列は、将軍の行列であり。天文18年の12代将軍義晴の近江没落を描いた「穴太記」を描く歌絵であることを論証した。

一節で、同時代の武家故実と行列の行装を比較し、通説である上杉謙信の行列ではなく、将軍の行列であることを論証した。二節は、故実書・将軍周辺の記録との照合から、天文18年の将軍義晴近江没落の行列であると、年次を比定した。三節

は、天文18年の義晴近江没落を著した「穴太記」と上杉本の行列を照合した。その結果、将軍の行列は「穴太記」の歌、記述と一致していることが明らかになった。上杉本は、「穴太記」を描く、歌・物語絵である可能性が高いのである。

第二章は、一節で行列以外の不自然な図様と「穴太記」を照合した。そして、「穴太記」と上杉本は行列以外の部分でも一致していることを明らかにした。

二節では、上杉本の中心画題である武衛邸前の闘鶏場面は、近衛植家が義晴追悼に詠んだ歌を描いていることを論証した。さらに、この歌は、「源氏物語」桐壺の巻で、「長恨歌の御屏風」を見て詠んだ歌を本歌取りしており、「長恨歌の御屏風」は平安時代に実在していた。また、上杉本は源氏絵屏風と共に上杉家へ贈られたという記録を持つなど、「源氏物語」と関係が深いことが、先行研究で明らかになっている。

上杉本は、「源氏物語」に擬えた「新長恨歌の御屏風」であり、「源氏物語」・「長恨歌」に擬えた義晴・慶寿院の愛情物語なのである。注文者は慶寿院である。永禄9年5月の義晴年忌法会が制作目的である。

三節では、上杉本が上杉家へ伝来した経緯について検討した。これまで、織田信長が上杉家に贈ったという記録はあるものの、信長が自ら滅ぼした室町将軍時代の京都を描かせることに懐疑的な意見も多かった。上杉本は、永禄の政変で慶寿院が殺されたとき、まだ狩野永徳の手元にあった。永徳は上杉本を完成させ、新将軍が上洛する時を待った。永禄11年、義昭が上洛し、上杉本は義昭に納められた。その後義昭は出奔し、二条城に残された上杉本は信長のものとなり、当時武田への対抗上、同盟関係を再確認する必要があった上杉謙信に贈られたのである。

第三章は、慶寿院の伝記である。室町期の御台は、日野富子以外はほとんど注目されることがなかった。しかし、義晴・義輝期は「足利一近衛体制」といわれ、近衛兄弟が義晴・義輝政権と一体化した活動を展開した特異な政治形態であることが明らかになっている。これまで、近衛植家・道増・義俊・久我晴通の男兄弟が注目され、それぞれの論考があり、近衛家が外戚として力を振ったとされてきた。しかし、その要である慶寿院は注目されることはなかった。だが、慶寿院は義輝時代大きな政治的影響力を持っていた。

一節では慶寿院近衛家時代を検証した。近衛尚通一家は、大家族であったが、結束が固い一家であった。二節では、撰関家から初めて将軍家へ嫁いだ慶寿院結婚の経緯と、結婚後の御台としての役割、御台御料所を検討した。三節では、義輝時代の慶寿院の活動を検証した。慶寿院は義輝後見者として政治的にも大きな影響力を持っていた。「足利一近衛体制」という特異な体制は、慶寿院がその要であり、慶寿院を支えることが近衛兄弟の使命だったのである。

第四章は、『穴太記』書誌に関する論考である。『穴太記』は多くの写本があり読本として流布した。また、絵入り版本として江戸初期に出版され、追善記としては

異例ともいえる人気があった。これは第2定型洛中洛外図屏風が多く制作された時期と一致する。

一節は、「穴太記」の元となった近衛種家の追悼文「万松院贈左府をいためる辞」に関する書誌情報である。これは義晴の死直後の天文19年5月26日に中陰霊前に供えられた。

二節は、「穴太記」成立年代について検討した。天文19年10月下旬右大臣一条兼冬が書写させたという奥書を持つ写本が多い。「穴太記」は奥書通り天文19年には成立していたことを検証した。

三節では、「穴太記」の作者を考察した。「穴太記」と『言継卿記』・『鹿苑日録』の記録は、日付や当事者以外知り得ない細部まで一致している。義輝周辺の人物が制作に関わっていたことは間違いないだろう。当時最も格が高く、しかも近衛家の庇護を受け、近衛家に入入りしていた連歌師宗養が作者であると推定した。

おわりに

上杉本ほど様々な主題・制作目的が各方面から出された絵画はない。しかし、多くの研究蓄積にもかかわらず、主題は謎に包まれ、十分な解明には至らなかった。このような謎に包まれた絵画になってしまった原因は、研究のスタート時点の方向性にあったといえる。もう一つの原因は、甲本も上杉本も歌絵の伝統である「判じ絵」であったことにある。

答えは単純で明快なことであった。甲本・上杉本洛中洛外図屏風は歌・物語絵だったのである。これは、従来のような状況証拠からの推論ではなく、文献との照合と歌絵の手法に基づく解釈という、実証的検討の結果得られた結論なのである。

洛中洛外図研究が混迷した原因に、美術史・歴史学の動向も大きく影響した。戦後の復興を目指す時代背景から、近世初期風俗画というジャンルや、町衆論が登場し、それに影響を受けた解釈がなされた。そして、中国文化の影響を過小評価してきた。

また、戦国期の幕府政治は「京兆専制論」が長らく通説であった。しかし近年は、むしろ管領制は終焉し、将軍側近政治であったことが検証された。しかし、洛中洛外図研究では、現在もなお「京兆専制論」を前提として解釈が行われた。

さらに、近現代的芸術観も洛中洛外図研究に大きな影響を与えた。無意識のうちに近現代的芸術観が、洛中洛外図解釈に入り込んでいたのである。

本論は、洛中洛外図屏風を研究対象とするはじめての専門書を意図して執筆した。洛中洛外図研究は、多方面の研究分野を横断する研究である。歴史学・美術史・文学研究の成果を広く取り入れ、戦国期の将軍家の願いを明らかにできたと考える。これまで、各分野独自に行われてきた研究成果を、総合化する必要性は叫ばれつつも、具体的に結実してきたとは言い難い。また、歴史学においても、政治史、文化

史、儀礼研究、寺院史、歴史地理、文芸史、公家・朝廷研究、都市史研究などに細分化し、相互の総合化が図られることは少なかった。本研究は、各分野を総合化する研究動向に寄与するであろう。

さらには、歴史研究において、文書・記録研究だけでなく、これまで重要視されなかった文学作品や美術作品にも視野を広げることで、より豊かな歴史像を描くことができることを明らかにできたと考える。かつ、文学研究・美術史研究において個別作品研究に留まっていた研究成果を、歴史的視野の中に位置付けることができたと考えている。

論文審査結果の要旨

論文内容の要旨

本論は、国立歴史民俗博物館蔵洛中洛外図屏風甲本（以下、歴博甲本）と米沢市上杉博物館蔵洛中洛外図屏風（上杉本）を素材として、これらが「歌絵」「物語絵」を描いたものであることを論証した上で、主題や制作年代、注文者、伝来などを解明しようとしたものである。これまで美術史・建築史・歴史学・都市史などの各分野で多くの研究が蓄積されてきたが、これらの成果を総合的に把握した上で、問題点を整理し検討を行った研究はなかった。また洛中洛外図研究は、絵画史料であるがゆえ、製作年代をはじめ推論に頼らざるをえない点が少なくなく、未だ定説が存在しない状況であった。そうした中で本論は、分野にとらわれない様々な資・史料を駆使して、実証的にこれらの屏風の意味を読み解こうとしたものである。そして先行研究において全く想定されることのなかった文学的表現に着目することにより、洛中洛外図屏風が「歌絵」「物語絵」であるという新たな視点を提示した論考である。本論の章立は以下の通りである。

序章 洛中洛外図屏風研究史と本論の構成

第一節 洛中洛外図屏風研究史

第二節 本論の課題と構成

第一部 洛中洛外図屏風解釈の前提

第一章 室町後期における歌絵・物語絵

第二章 歴博甲本洛中洛外図屏風 將軍邸近辺の空間構造

第二部 歴博甲本洛中洛外図屏風

第一章 歴博甲本洛中洛外図屏風に描かれた歌絵

第二章 三条西邸鶯合と近衛邸の風呂

- 第三章 祇園会再興と足利義澄
- 第四章 足利義澄と能・参内
- 第五章 歴博甲本洛中洛外図屏風に描かれた比丘尼御所

第三部 上杉本洛中洛外図屏風

- 第一章 上杉本洛中洛外図屏風に描かれた将軍の行列
- 第二章 上杉本洛中洛外図屏風と『穴太記』
- 第三章 足利義晴御台慶寿院の生涯
- 第四章 『穴太記』の成立

結論

さて本論は三部から構成され、これに序論と結論が加わる（四百字詰原稿用紙1128枚（本文・図版・表等を含む））。そこで各部の内容を略述する。

〔序論〕まず歴博甲本と上杉本の書誌情報を提示し、これらが百本以上現存する洛中洛外図屏風の中で初期洛中洛外図に分類されるもので、その後に製作された洛中洛外図や都市図に大きな影響を与えたと位置づけ、この二本を研究する意義を述べる。さらに歴大な洛中洛外図屏風の研究史の到達点や問題点を整理した上で、本論の目的と課題、構成を提示した。

〔第一部 洛中洛外図屏風解釈の前提〕第一章では、歴博甲本と上杉本が「歌絵」であることを論証する前提として、これらが製作された室町後期、「やまと絵」において「歌絵」や「物語絵」が多く確認されることを明かにした。それらの実例を掲げながら、「歌絵」の特徴や手法として、異なる時間、異なる空間が同一画面に描かれる「異時空間同図」、人物の描かれぬ「留守模様」、「隠し文字」などの手法がみられることを確認する。そして「歌絵」にはそうした不自然な図様が多くみられるが、それこそが「歌絵」の特徴であり、「歌絵」の鑑賞者にその意味を考えさせる「判じ絵」であると説く。第二章では甲本に描かれる室町後期における将軍邸や管領家である細川邸の位置を確認することにより、将軍・管領家権力構造についても取り上げた。結果、歴博甲本の将軍邸は十二代将軍義晴の大永度御所であり、細川邸は細川高国の屋敷であり、歴博甲本の注文者が義晴である可能性を示唆した。そしてこうした権力構造や時代状況こそが、歴博甲本や上杉本が製作された大きな要因であるとして、第二部以降での洛中洛外図屏風各本解釈に繋がる問題を述べた。

〔第二部 歴博甲本洛中洛外図屏風〕第二部では歴博甲本洛中洛外図屏風の分析を行った。第一章では歴博甲本の上京隻に描かれる厩座敷に座る人物が、管領で京兆家当主の細川高国であるとし、その根拠として高国が十一代将軍足利義澄に贈った辞世の句と一致することを挙げた。また下京隻に張札がある「かくらおか」や留

守模様である「筒井筒」などの不自然な図様が、文亀三年（一五〇四）に後柏原天皇主催で行われた三十六番歌合において義澄が詠んだ「歌絵」であると述べた。その上で歴博甲本の主題は不遇な死を遂げた高国と義澄の鎮魂、さらに義澄の歌に託された天下静謐であり、製作目的と年代は高国十三回忌と義澄の三十三回忌が重なる天文十二年（一五四三）と言及した。そして注文者は義澄の子で十二代将軍の義晴であると示唆した。これらを裏付けるために、第二章では義晴と高国との密接な関わりを示す三条西邸前鶯合や近衛邸の風呂の図様を検証し、第三章では義澄が祇園会を再興したことにより、祇園会が描かれたとする説を述べ、第四章では「観世能」や禁裏南庭の図様は、義澄に関わる「物語絵」であると論じた。第五章は、将軍家の女性が入室した比丘尼御所が、数多く描かれている点に注目したもので、その中の宝鏡寺に記される白布伸子張りの図様は義澄の妹に繋がるものとした。以上から、歴博甲本は義澄と高国にまつわる「歌絵」や図様が異時空間同図で描かれ、両者の鎮魂のために義晴によって製作されたものであると主張した。そして先行研究によって唱えられていた製作年代、主題、注文者とは全く異なる説を実証的に提示した。

〔第三部 上杉本洛中洛外図屏風〕第三部では上杉本に描かれた図様を検討した。第一章で、上杉本の中で最も注目されてきた将軍邸横の行列が誰のものかを特定するために、武家故実等に照らし合わせた結果、新たな説として第十二代将軍義晴の行列の可能性を指摘した。そして天文十八年の義晴没落を記した「穴太記」の歌と行列の様相が一致していることから、上杉本も「歌絵」であるとした。第二章では、上杉本の最大の特徴である金雲についても「穴太記」の記述に依るものとした。そしてその他の図様も「穴太記」の様々な場面を異時空間同図で描いているため、天文末年と永禄初年の景観が混在していると説く。これらの指摘は、先行研究が上杉本を写實的都市図として理解してきたことを根底から覆したものといえる。そしてその主題は義晴の追善であり、その注文者は義晴の御台慶寿院と結論づけた。そこで第三章では、慶寿院が当時の幕府体制において如何なる役割を果たしたのかに注目した。撰関家である近衛家から嫁いだ慶寿院は第十三代義輝の後見役として将軍家家長といえる存在であり、義晴・義輝期の「足利－近衛体制」の要となる重要な人物であったと言及した。第四章は、上杉本の「歌絵」・「物語絵」の素材である「穴太記」を論じたもので、義晴死後まもなく製作された信憑性の高い記録と評価し、その作者はこれまで不明とされているものの、近衛家に近い連歌師谷宗養と推測した。

〔結論〕洛中洛外図屏風は「都市図」「風俗画」「写生画」として京都のある時期の景観を描いたものとされてきたが、本論では歴博甲本と上杉本を検証した結果、双方とも「歌絵」「物語絵」であり、屏風を鑑賞する者たち－例えば公家クラスの人びとで、文学の素養を持つ教養人たち－を楽しませる謎解き「判じ絵」であ

つたと主張する。つまりこれまで歴博甲本と上杉本において、歌や物語といった文学的素材を描いていることに気づかなかつたために、不自然な図様や景観年代の矛盾を説明できなかつたと述べる。しかし文学的素材を描いていることは「絵画史料」としての有効性を失うものではなく、政治・文化・社会・思想を知る「歴史史料」としての活用に繋がると説き、よつて本論が新たな洛中洛外図研究のスタイルを提示したことを、本論の成果として掲げ締めくくる。

論文審査の結果と要旨

本論は、洛中洛外図屏風の中の歴博甲本・上杉本に描かれた図様を一つ一つ丹念に読み解くことにより、景観年代・製作年代、主題・制作目的・注文者・伝来・絵師を再検討し解明しようとしたもので、その論証は日本文学や有職故実、建築学、絵画史、歴史学等の幅広い知識に裏打ちされた詳細かつ緻密な方法が用いられており、これまでの洛中洛外図研究に比して各段に説得力があるものと評価される。以下に本論の注目すべき点や評価される点を掲げることにした。

まず第一に、先行研究では洛中洛外図を目にみえる京都の姿である「都市図」や「風俗画」として見なしてきたが、本論では「歌絵」「物語絵」という、時として非現実の、目に見えない世界を描き出しているという新たな視点を提示した点も興味深い。こうした先行研究に捕らわれることない斬新な見解は、すでに『史艸』や『戦国史研究』などに掲載され、絵画史の分野において高い評価を受けている。

第二に、歴博甲本・上杉本ともに、先行研究が提示してきた景観年代・製作年代、主題・制作目的・注文者・伝来・絵師などを覆す新たな説を掲げており、今後の洛中洛外図研究において、新たな旋風をよぶものとして注目される。

第三に、屏風の製作目的などの論証過程で、派生的に取り上げられる中世後期の京都における政治・社会・都市の問題についても、貴重な素材を提供しており、歴史学の様々な分野にも寄与する研究であるといえる。

このように本論における検討素材の処理、史料解明の枠組み、多くの史・資料に裏付けられた史実などは、いずれも重要な成果であり、日本文学・歴史学・絵画史・建築史などの幅広い研究に大きく貢献することは確かであろう。

ただし本論の審査と口頭試問の中で、審査委員からいくつかの質問と指摘がなされた。第一には、先行研究の一部が京兆専制論に基づいて唱えた説を否定する上で、京兆専制論自体を批判するのは早計ではないか、その点について本論で踏み込むには論証が未だ十分ではないとの意見があつた。またこうした政治的な問題が屏風の製作に大きな影響を与えている以上、「歌絵」であるという評価のみではなく、政治性も併存するとの見解を示すべきではないかという指摘があつた。第二に、歴博甲本に祇園会が描かれたとの部分において、祇園会に関する理解が不十分であつたり、幕府組織の問題を踏まえていない点が指摘された。将軍が祇園会の再興に積極

的であったとの見解はきちんと論証されておらず、再検討作業が求められた。第三に、上杉本に描かれたとする「穴太記」については、そのテキストの評価について疑問が示された。特に内容の信憑性や作者の比定については問題があり、さらに多くの写本の検証が必要であり、素材として用いる上での慎重さを求める意見が出された。第四に、屏風を「歌絵」「物語絵」として読み解く上での重要なヒントとなる、張札や書き込みが何時、誰によって付されたと判断するののかとの質問がなされた。これについては、本論の論点にも関わる重要な点であるため、再度、原本を確認して独自の見解を示す必要があるとの意見が示された。

その他、内容的に粗密があり、史料の引用が不十分な所があるため、論証の未了な部分があること、論点や本筋から逸れた部分は註に回すなど、内容を絞り込むべきであるとの指導がなされた。しかし本論の基本的な構成や方向性、結論には疑問が及ぶことはなく、本論の学術的な価値については、審査委員一同異存のないことを確認した。

上記の審査結果を総合的に勘案した結果、審査委員会は全員一致で、本論が博士論文としての学問的水準を十分に越えるものであり、博士（文学）の学位を授与するに値するものであると判断する。